

児童文学叢書における「日本文学」 ——伝承・古典・近代文学の体系化——

佐藤 宗子
千葉大学・教育学部

The Formation of a Japanese Literary Canon:
Contributions Made by Postwar Libraries for Young Readers

SATO Motoko
Faculty of Education, Chiba University, Japan

一九五〇年代に刊行された「世界少年少女文学全集」(創元社)と「少年少女世界文学全集」(講談社)の二つの叢書について、特に「日本編」に注目し、まずは「日本編」の構成を確認することから出発し、二叢書の内容を比較することを通して、大まかな「日本文学」の内実を把握した。基本的に伝承文学・古典文学・近代文学の三分とする点のみならず、それぞれの収録作品も相当程度共通している。他方、「近代文学」「児童文学」に該当する巻では、それぞれの刊行時期の微妙な差異を反映するように、構成の差異が認められるとともに、その背景となっている「文学史」的な意識も窺い知ることができる。さらに、いくつかの追究すべき点を指摘したが、それにより、今後、他社の「日本文学」関連叢書を検証することを通して、戦後における「日本文学」とくに「近代文学」「児童文学」の「カノン形成」の過程を追究していくことができることが確認できた。

キーワード：児童文学 (Children's literature) 日本文学 (Japanese literature) 教養形成 (cultural education) 叢書 (series) 体系化 (formation) カノン (literary canon)

一九五〇年代に刊行された「世界」を冠する二つの少年少女向け文学叢書は、一方で「地域割り」という方法を取ることで包括的に「世界」の文学を紹介することを可能にしたとともに、他方で「日本」をその「地域割り」の中に組み込むことで、従来の「世界」と「日本」を対比させる見方からの脱却を果たし、「日本文学」を「世界文学」の一つとして位置付けた点に特徴がある。

これまでの研究を通じて、この二叢書——創元社刊行の「世界少年少女文学全

集」と、講談社刊行の「少年少女世界文学全集」——以降の「地域割り」の手法を取る叢書が、どのような推移を見せていったかを、とくに六〇年代刊行の叢書に的を絞って追究し、「世界各地の文学を包括的に子ども読者に手渡す」ことを意図した、いわば「教養形成」が、次第に変質していくことを明らかにしてきた。

そこで、先に挙げた二つの特徴のうちの後者について、検討を開始する。該当する二叢書において、「日本文学」所収の巻は、具体的にどのような構成になっているのかをまずは確認していきたい。それを通して、第二次大戦後に少年少女を読者対象とした場合に、何が「日本文学」として捉えられたのか、二叢書における差異

と共通性からは何を読み取ることができるのか、同時期及びその後の他の「日本文学」関係の叢書とはどのような関係にあると考えられるのか、といったことを考察し、今後の青少年向け叢書群における「日本文学」の内実追究の第一歩としていくこととする。

二

(一)

二叢書の「日本文学」所収の巻を検討するに先立ち、これら「地域割り」叢書の「日本編」の存在が、どのような新しい意味を持っていたかを確認しておこう。

先行して刊行された青少年向け乃至児童向けの代表的な叢書といえ、戦前のものとしては、いずれも一九二七年から刊行開始となった「日本児童文庫」(アルス)と「小学生全集」(興文社)、戦後のものとしてはいずれも一九五〇年刊行開始の「岩波少年文庫」(岩波書店)と「世界名作全集」(講談社)を挙げることができよう。ただし、これらの叢書はいずれも、「世界」の文学における「日本文学」という括りの意識に乏しいといつてよい。

「日本児童文庫」には『世界童話集』―『日本童話集』という対比される巻々があるが、『印度童話集』や『支那童話集』もある。「小学生全集」には、『世界童話集』―『日本童話集』の対比のほか、『日本文芸童話集』―『外国文芸童話集』もある。つまり、ここでは「日本」は、「世界」の外に置かれているもの、では「世界」―「海外」であるかといえ、そうともいえない。

また、「岩波少年文庫」や「世界名作全集」は、基本的に作品中心の書目選定がされた叢書である。

これに対し、一九五三年刊行開始の「世界青少年文学全集」は、第一期三二巻+第二期一八巻の計五〇巻のうちで、欧米の諸地域に重きを置くとはいえず、イギリス・アメリカ・フランス・ドイツ・ロシア・北欧・南欧・アジア・日本と、「世界」の全体を見渡せるような視野の上に立った構成の叢書となっていた。(第二部一八巻では、テーマ別の巻の比率が高くなっている。)またこの叢書に追隨した、一九五八年刊行開始の「青少年世界文学全集」は、初めから五〇巻の予定の中に、ほぼ同様の地域割りおよび巻数配分を組み込んでおり、折からの経済状況好転の中で、この講談社版が部数を伸ばしたことにより、「世界」の文学を「地域割り」で

捉える意識が、日本の児童文学出版の世界において定着したともみなしうる。

この講談社版刊行途中で、その後の児童文学普及に大きな影響を及ぼすことになる、石井桃子ほか『子どもと文学』(中央公論社、一九六〇↓福音館書店、六七)が世に送り出されているのは、ある意味では皮肉ともいえるだろうか。よく知られるように、同書の「はじめに」では、「世界の児童文学のなかで、日本の児童文学は、まったく独特、異質なものです。世界的な児童文学の規準―子どもの文学はおもしろく、はっきりわかりやすくということとは、ここでは通用しません。」との記述がある。同書の主張を見ていくと、ここでいう「世界の児童文学」は、実は「英米の児童文学」であることが明らかなのだが、「世界」―「海外」―「英米」であり、「日本」の文学―とくに近代の児童文学―はまったく「異質」であるという認識が、そこから形成されてしまった側面は否めない。

「世界」のなかに「日本」をおき、また各地域と同様の程度の巻数を「日本」に割いた、二つの叢書―ここでは、どのような「日本」の文学が概観できるように構成されていたのか。以下、順に見ていくことにしよう。

(2)

「世界青少年文学全集」(創元社)の「日本編」は、第一期・第二期の通巻でいうと、第二八―三〇巻、第四四巻―四五巻の五冊が該当する。また、その後の第二部一八巻では、第一三巻の一冊が該当している。

まずは、それらの全体的概容を示しておこう。

第二八巻(日本編二) 日本童話集 坪田譲治著 一九五四・八・二五

桃太郎、一寸法師、浦島太郎、花咲かじじいなど、昔話を中心にした伝承文学を

全七四話収録

第二九巻(日本編二) 日本古典文学集 一九五五・二・二五

古事記物語 林房雄訳 (一〇話)

今昔物語 片桐顕智訳 (一二話)

堤中納言物語 中村正爾訳 (三話)

宇治拾遺物語 片桐顕智訳 (四話)

義経記―よしつね物語― 高木卓訳

おとぎ草子 堀尾勉訳 (三話)

狂言 北村寿夫訳 (三話)

雨月物語 上田秋成作 堀尾勉訳 (二話)

竹取物語 川端康成訳

第三〇巻 (日本編三) 文芸童話集 一九五三・九・一

森鷗外「山椒大夫」、小泉八雲(光吉夏彌訳)「耳なし芳一の話」、島崎藤村「お

んどりの冒険」、有島武郎「一ふさのぶどう」、志賀直哉「清兵衛とひょうたん」、

中勘助「つるの話」、鈴木三重吉「少年駅伝夫」など(二編)、芥川龍之介「くも

の糸」など(二編)、佐藤春夫「いなごの大旅行」など(二編)、豊島与志雄「エ

ミアンの旅」など(二編)、宇野浩二「春をつげる鳥」など(三編)、川端康成

「級長の探偵」など(二編)、井伏鱒二「やねの上のサワン」

小川未明「赤いろうそくと人魚」など(四編)、坪田譲治「かっぱの話」など(七

編)、浜田広介「五匹のやもり」、宮沢賢治「ちゅうもの多い料理店」など(四

編)

……以上、一七作家・三六編収録

第四四巻 (日本編四) 日本古典文学集(続) 一九五六・五・五

落窪物語 中村正爾訳

平家物語 富倉徳次郎訳

中世説話物語 井本農一訳 (五話)

曾我物語 高木卓訳

西鶴諸国話 杉森久英訳 (七話)

東海道中膝栗毛 野上彰訳

弓張月物語 林房雄訳

第四五巻 (日本編五) 現代童話集 一九五六・三・一五

青木茂「大万化狐」、北畠八穂「十二歳の半年」、椋鳩十「黒物語」など(三編)、

石井桃子「山のねこトム」、飯沢匡「子どもおとな」

塚原健二郎「ずくひき」、横本楠郎「花電車」、壺井栄「柿の木のある家」など

(二編)、川崎大治「川をわたる歌声」、猪野省三「ぬすまれた自転車」、国分一

太郎「犬遊ばせ」、関英雄「銀時計」、岡本良雄「ある町の話」

千葉省三「乗合馬車」、浜田広介「ふしぎな山のおじいさん」、吉田甲子太郎「自転

車の夢」、酒井朝彦「雪娘」、奈街三郎「夜の木馬」、後藤植根「空をとんだケイタ

坪田譲治「夢」など(四編)、木内高音「建設列車」、平塚武二「玉虫のずしの

物語」、与田準一「花もよろしい」など(二編)、佐藤義美「歩いた雪だるま」

など(二編)、新美南吉「牛をつないだつばきの木」など(二編)

小川未明「考えこじき」

……以上、二六作家・三五編収録

第二部 第一三巻 (日本編) 現代少年少女小説集 一九五八・三・二〇

「花物語」 吉屋信子

「万葉姉妹」 川端康成

「新聞小僧」 阿部知二

第一期の三冊の構成は、極めて明確である。伝承文学(昔話中心)、古典文学、近代以降の文学の三区分といってよい。おそらく、他の地域における、同様の巻構成が基本となったのだろう。各巻に題名が付されているが、昔話も近代以降の作品も、ともに「童話」の語で括られているのが、今日の眼からすると、いかにも一昔前の観がある。とはいえ、限られた分量の中で、バランスよく按分したものといえる。近代以降では、明治以降の近代文学を代表する作家の中に、文壇作家の童話もあわせて並べられており、それらと分けた後半に、児童文学の専門作家として、坪田譲治以下四人が並ぶ。坪田の作品収録数が多いのは、この叢書に対する関与度の高さゆえだろう。浜田広介が一編のみというのは、たとえば先に挙げた『子どもと文学』で、未明・広介・譲治を「童話」の大家のいわば「御三家」のように扱っていることを考えると、少し腑に落ちない。何か事情があったのかと想像される。

第二期の二冊では、古典文学作品が追加収録され、また、「現代童話集」として、児童文学の作家たちの作品が、戦後のものまで含むかたちで収録された。

そのうち、古典の領域では、第一期・第二期を合わせた場合、説話および源平の戦い関連の物語が、比率として高くなったようにみえる。

そして「現代童話集」であるが、「解説」執筆は堀尾勉で、「坪田譲治先生の意を受けて、編集部において作成」されたと記される。となると、構成の面でも坪田の意図が反映されたのだろうか。本巻の特徴は、(小川未明を別格として)作家が四グループに分けられていること、そして配列にあたっては、その四グループの内、新しい作家群が冒頭に置かれ、以下遡るかたちとなっている。その意味で、少し珍

しく興味を惹くが、当時の子ども読者に対して、新鮮さを際立たせようとしたものだろうか。収録作家および作品は、現在では歴史的な評価にとどまるものもあれば、さらに埋もれた状態のものも含まれており、六十年近い過去の時点における評価の一端として、今後、さらに検討の余地があると考えられる。

第二部の一冊には、この時点における「小説」という区分にあたる作品、すなわち長編が収録されている。その際、「少年向け」と「少女向け」の双方から選ばれている点も、注意を向ける必要があるだろう。この時期までというならば、長編を選定しようとするなら、大衆児童文学が主対象になってくる。それは同時に、対象読者の性別を異にするのが通例であった。ただし、補遺的な意味合いも持つ第二部への収録ということもあり、この巻については、これ以上の言及は控える。

第一期・第二期で、近代以降の作品が収録された二冊に再度眼を向けてみよう。第三〇巻刊行が五三年、そして第四五巻刊行が五六年。初めから全五十巻の予定が立っていたのなら、「文芸童話集」には、もう少し、いわゆる近代文学の作家・作品が収録されたことだろう。それというのも、「山椒大夫」などごく一部の例外を除き、基本的には、一般文学の作家から選ばれている作品も、「童話」ジャンルに該当するものが中心となっている。つまり、「近代文学」からの選定が、短編「小説」を除いた「童話」中心になっているのである。作品選定は単独では行わないだろうが、収録された作品数の多さなどからも、坪田譲治の意思がそれなりに反映したものであろうか。仮に、一冊をまるまる「近代文学」に充てられることが初めに決定していたとしたら、だれが選者となり、どのような作品が選ばれたであろうかと、この叢書に関わった外国文学者たちを含めた顔ぶれの豪華さを思うと、多少残念な気がしてくる。

また、もしもそうであったとするなら、実際には第三〇巻に収録された未明・広介・譲治・賢治の四人の作品も、他の多くの児童文学作家たちの作品と同じく一冊に収録されたはずである。その場合には、果たしてどのような作家が選ばれ、収録作品数はどのような配分となったのだろうか。さらに、その際の配列は、どのような工夫が施されたであろうか。

ちなみに、いわゆる「童話」伝統批判の先駆けとなる宣言文、早大童話会の「少年文学」の旗の下に！」が、同会の機関誌『少年文学』一九号に掲載されたのが、奇しくも五三年のことである。その後の「現代児童文学」を出発させ、牽引してい

くことになる新しい作者たちによる長編の作品群は、未だ日の目を見てはいないが、それでも五六年までの間に、同人誌活動などを通じて、その胎動は明らかとなってきていた。すなわち、「近代文学」と「児童文学」に対するまなざしに、変化が起きていく過渡期に差し掛かっていたのである。

(3)

「少年少女世界文学全集」(講談社)の「日本編」は、全五〇巻のうち、第四五巻〜第四九巻の五冊が該当する。刊行開始が五八年であるということは、おそらく、創元社の叢書の第二期までの五〇巻の構成・内容を参考として見渡し得た上で、企画編集ができたはずである。それだけに、創元社版との共通点・相違点が気になってくる。

こちらにも、全体的概容を示すことから始めるとしよう。

第四五巻(日本編一)

一九六〇・四・二〇

「古事記」 木俣修訳 (二九話)

「竹取物語」 坪田譲治訳

「日本民話」 浜田広介編 (三二話)

「アイヌ民話」 金田一京助編 (三話)

「万葉集」 木俣修訳 (一八編)

第四六巻(日本編二)

一九五九・七・二〇

「今昔物語」 福田清人訳 (七話)

「平家物語」 杉森久英訳

「太平記」 福田清人訳

「義経記」 伊藤佐喜雄訳

「お伽草子」 高野正巳訳 (六話)

「謡曲・狂言物語」 丸岡明訳 (五編十三編)

第四七巻(日本編三)

一九六〇・一〇・二〇

「八犬伝」 滝沢馬琴作・豊田三郎訳

「東海道中膝栗毛」 十返舎一九作・麻生磯次訳

「雨月物語」 上田秋成作・村松定孝訳 (七話)

「西鶴名作集」 井原西鶴作・暉峻康隆訳 (二四話)

「国姓爺合戦」 近松門左衛門作・青江舜二郎訳

「芭蕉、蕪村、一茶名句集」 中村草田男訳

第四八巻（日本編四） 現代日本文学名作集 一九六一・五・二〇

「小さいポチ（「平凡」から）」・二葉亭四迷作、「山椒大夫」・森鷗外作、「春の鳥」など二編・国木田独步作、「耳なし芳一」など二編・小泉八雲作／高野正巳訳、「坊っちゃん」・夏目漱石作、「千曲川のスケッチ」など二編・島崎藤村作、「馬鹿一」・武者小路実篤作、「清兵衛とひょうたん」など二編・志賀直哉作、「いふさのぶどう」・有島武郎作、「くもの糸」など三編・芥川龍之介作、「てんぐわらい」・豊島与志雄作、「春をつげる鳥」・宇野浩二作、「いなごの大旅行」・佐藤春夫作、「路傍の石」・山本有三作／福田清人編、「はえ」・横光利一作、「ばったとすずむし」など二編・川端康成作、「屋根の上のサワン」・井伏鱒二作、「いちじくのある家（「幼年時代」から）」など二編・堀辰雄作、「赤がえる」・島木健作、「現代短歌」・木俣修編、「現代俳句」・中村草田男編

……以上、一九人の作家・二七編＋短歌・俳句

第四九巻（日本編五） 現代日本童話集

一九六二・五・二〇

「こがね丸」・巖谷小波作、「少年駅伝夫」・鈴木三重吉作、「港についた黒んぼ」など三編・小川未明作、「先生とお墓」・秋田雨雀作、「庭さきのこと」・山村暮鳥作、「じんべえさんとフラスコ」・相馬泰三作、「時男さんのこと」・土田耕平作、「注文の多い料理店」など二編・宮沢賢治作、「五匹のヤモリ」など二編・浜田広介作、「魔法」など二編・坪田譲治作、「ゆきむすめ」など二編・酒井朝彦作、「とらちゃんの日記」・千葉省三作、「小さいあらし」・北川千代作、「わにの子事作」・塚原健二郎作、「花電車」・横本楠郎作、「てんぐの庭」・猪野省三作、「夕焼けの雲の下」・川崎大治作、「えんぶだごんの思い出話」・与田準一作、「水泳のはじめ」・平塚武二作、「青と黒と赤」・奈街三郎作、「動物園からにげたさる」・佐藤義美作、「北国のいぬ」・関英雄作、「百姓の足 ぼうさんの足」・新美南吉作、「人力車と飛行機」・下畑卓作、「あすもおかしいか」・岡本良雄作、「自転車のゆめ」・吉田甲子太郎作、「坂道」・壺井栄作、「三太荻先生の野球」・青木茂作、「おばけやしき」・斎田喬作

……以上、二九人の作家・三五編

創元社版と比べると、基本的な巻構成はほぼ共通している点がまず目に付く。講談社版では、神話と昔話を基本にして一冊に収録、そして中古・中世で一冊、近世

で一冊が古典に充てられるが、収録作品も相当程度、共通する。差異を挙げるなら、講談社版では「太平記」と「八犬伝」が収録されていること、そして「万葉集」や近世の俳句など韻文系統を含んでいることとなる。

近代以降は、「近代文学」で一冊、「児童文学」で一冊と、明確に分かれている。この二冊はどちらも、配本時期で考えられると、ずいぶん遅い。つまり、それだけあとまで、巻構成、内容の確定を遅らせていた、ということが出来る。おそらくは編集作業の許されるぎりぎりまで、収録作品の選定に時間をかけていたことが窺える。二冊が刊行された一九六一年・六二年は、すでに「現代児童文学」が発行し、新しい世代の気鋭の作家たちが次々に作品を世に送り出し始めた時期に当たる。何よりも、第四九巻の「解説」を、「童話」伝統批判の中心人物の一人である鳥越信が担当していること自体、画期的といつてよい。

そして、右記のように目次を眺めると、創元社版との相違点の一つが良く見える。すなわち、講談社版は、作品名を先に掲げる目次立てとなっているのである。実際には、講談社版の編集作業においても、候補としては作家名を挙げて、その後作品を選定していたのかもしれない。それでも結果的に、読者への提示として、作品主体となったことに違いはない。とくに第四九巻では、作品名が並んだ際に、意表を突かれ、何だろうと興味をそそられるような類の題名が多いことに気が付く。些細なことのようにだが、実際の掲載の仕方として、作家名主体が作品名主体か、実はこの差は見逃せぬものといえよう。

「近代文学」の収録内容をみると、必ずしも短編に限っていないことがわかる。「平凡」から」といった部分取りを明示した場合もあれば、「千曲川のスケッチ」のように、作中から幾つかの章を選んで収録した場合もある。また、「路傍の石」などは、もちろんそのまま子ども読者が読むことができる作品であるのに、あえて福田清人の「編」による形態での掲載となっている。もともと現代の日本語で執筆された作品としては、このような方法による掲載は、無論好ましいこととは言えない。だが、一定の大きさの枠内に、多様な作品を収めようとする意図があるとき、「世界」の「地域割り」叢書ではこうした方法は、この後もしばしばみられるものである。翻訳と創作の差があるとはいえず、「世界」の中に「日本」が置かれた叢書であることを考えると、その限りにおいては無下に否定することもできない。

また、文壇作家の手による「童話」作品は、「近代文学」のほうに収録されている

るのだが、それらと同列に、いかにも近代の「小説」の感がある、横光利一や堀辰雄、島木健作の作品が取り上げられていることが興味深い。「近代文学」の幅が、そこから見えてくるように思われる。川端康成の二作も、創元社版での収録作がいずれも少年小説、少女小説であったのとは異なり、「掌の小説」に該当する二編が選ばれている。

その一方で、「近代文学」「児童文学」とともに、二つの叢書では、共通する収録作品がかなり多く見つかる。その中には、「山椒大夫」や「清兵衛とひょうたん」のような、今日もよく知られる近代の短編もあれば、「一ふさのぶどう」や「くもの糸」のように、文壇作家の童話としては、その著者の代表とされる作品もある。小川未明などは両者で、「港についた黒んぼ」「野ばら」「月夜とめがね」と三作品も重なっており、宮沢賢治も「注文の多い料理店」「セロひきのゴーシュ」と二作が重なる。これらの作品は、つまるところ、この半世紀余りにわたり、一定の評価を維持し続けてきた、ということができらるだろうし、その意味では重なりがあること自体、頷けるところでもある。

ただし、浜田広介「五ひきのやもり」がなぜ双方で重なるのかなど、どうもよくわからない点もある。もちろん、それなりに知られた作品であるにせよ、いずれも一編しか収録しないのなら、なぜこの作品にしたのだろうか。また、この段階では、「春をつげる鳥」「いなこの大旅行」のように、文学史的には今も名を残しているが、現実的には読み継がれてはいない作品や、酒井朝彦や吉田甲子太郎のように、現在では児童文学作家としてあまり顧みられなくなった作家が他の大家に伍して並べられている点にも、注意が必要だろう。この後の叢書類では、どのような扱いを受けることになっていくのか、いずれ時代を下る中での変化に注目し、評価の変遷を把握していくことを試みたい。

講談社版の独自な点をさらに二点挙げておこう。

一つは、「文学」の流れの中に、韻文をきちんと位置付けている点。「近代文学」が扱われた第四八巻でも、短歌・俳句を収録している。編者である木俣修・中村草田男は、いずれも、古典作品が収録された巻でも訳者乃至編者として関与している。こうした専門家の尽力あつたことだろうが、「万葉集」から近世の俳句、そして現代の短歌・俳句まで、巻を跨いで流れを作りえた。文学史という眼を養っていく点でも、十分に評価することができる。

もう一つは「児童文学」の巻における配列である。明治期を代表する児童文学者、巖谷小波の作品を巻頭に置き、次に『赤い鳥』の主宰者であつた鈴木三重吉の作品を据えることで、明治以降の歴史的な主要ポイントが押さえられた。この配置には、まだ若く、編集の中核には名を出していないものの、「解説」執筆者の鳥越信の意思が反映しているものと考えられるだろう。児童文学研究者が関わったことが、「児童文学史」の意識を働かせた構成につながつたものとして、評価することができる。

三

二つの叢書について、順次、「日本編」の概容を検討してきた。そこから引き出せることを、あらためてまとめておきたい。

まず、大まかな文学ジャンルとして、伝承文学・古典文学・近代文学の三つに区分される。

伝承文学としては、昔話と神話がとくに中核をなすが、その比重や再話される素材等は、再話者によつて当然ながら異なる。これは、たとえば戦前にすでに刊行された鈴木三重吉の『古事記物語』（赤い鳥社、一九二〇）や、ほぼ同時期に刊行された福永武彦『古事記物語』（岩波書店、一九五七）などの再話作品と比較していくことで、時代性や物語選択の基準について考察を深める契機となるだろう。

古典文学については、説話や軍記物など、物語性のある作品が選ばれがちである。これは、たとえば一九九〇年代に刊行された「少年少女古典文学館」全二五巻（講談社、一九九一―一九九四）——その後、「21世紀版少年少女古典文学館」として、二〇〇九年から一〇年にかけて再刊——の収録作品と比べてみれば、差が際立つ。「く古典文学館」では、「枕草子」や「徒然草」などの随筆も各一卷あり、「源氏物語」上下巻もある。いったい何が、こうした作品選択の差を生んだのか。その追究には、たとえば戦後の国語教科書への掲載作品選択など、古典教育の動向や、古典研究の進展等も視野に入れていく必要があるだろう。

そして、重視したいのは、近代文学の領域である。古典文学とは異なり、明治以降の文学の流れを、「近代文学」として少年少女にもわかるようなまとまりあるものにして提示すること自体、第二次大戦後になって生み出された、新しい「媒介者」の仕事と言つてよい。また、この時期においては、「近代文学」と「児

「日本文学」が、接点を有しつつも分かれていく過程にある。その時、先に指摘したような、作家主体か作品主体かといった違いすら、基本的な見方として、立場を異にするものとなる。さらに、短編と長編に対する扱い方、女性作家の不在——二つの叢書とも、収録された近代文学作家の中に女性はいない。児童文学の区分のほうでは、(第二部を除く)創元社版で壺井栄・北島八穂・石井桃子の三名、講談社版で北川千代・壺井栄の二名が数えられる——、「童話」と「小説」の区分の仕方、未明・広介・譲治に加えて賢治・省三・南吉など、後に主要作家と目されるようなそれぞれの作家の位置づけ等が、今後「近代文学史」と「児童文学史」の、それぞれの確立の経緯を検証する際の問題点として、起点に据えることができる。

その上で、今後の研究の可能性をさらに展望してみることが出来る。

「世界少年少女文学全集」(創元社)と「少年少女世界文学全集」(講談社)の二つの叢書が、その後の翻訳叢書に大きな影響を与えたことは、この数年間に発表した小論で明らかにしてきた。では、その中の「日本編」の構成やそこに収録された作品群は、日本の近代文学や児童文学を対象とした叢書と、どのような関係を持つと考えられるのか。

まずは、二つの叢書と同時期またはその少し後に刊行された、日本文学を対象とする叢書に目を向けていくことになる。

たとえば、河出書房からは一九五〇年代に、三種の叢書が刊行されている。「日本児童文学全集」(全一二巻、一九五三―五五)では、巻により、「童話篇」「詩・童謡篇」「児童劇篇」「少年少女小説篇」などの区分がされており、各巻には複数の作家の作品が、作家ごとのまとまりとして「〇〇〇〇集」のように収録されている。また、「日本少年少女名作全集」(全二〇巻、一九五四―五五)は、大衆文学系の作家の作品集となっており、この場合、「名作」という語が叢書名に冠されていることも、何らかの意味を帯びていることが予想される。そして、「日本少年少女文学全集」が一九五七年初頭から刊行されるのだが、確認できたのは配本の第三回までで、その時点で版元が経営破綻し、そのまま刊行が中止されてしまったようである。この叢書は、各巻に収録作家名を掲げて、たとえば第一回配本・第九巻は「小川未明・秋田雨雀・坪田譲治・浜田広介集」、第二回配本・第一巻は「下村湖人集」、第三回配本・第三巻は「島崎藤村集」となっており、未完となった第四回配本予定・第八巻は「山本有三集」のはずであった。第九巻の児童文学作家の組み合わせ

に秋田雨雀が入ることも興味深いが、島崎藤村や山本有三の巻では、「小説」のみならず「感想」や「戯曲」も合わせて収録されるという企画となっている。この叢書が無事に完結していたら、全体としてどのような陣容となっていたかと、惜しまれる。

また、少し時代が下るが、偕成社からは「日本児童文学全集」(全一五巻、一九六一―六三)、「少年少女現代日本文学全集」(全二四巻↓四〇巻、一九六三―六五)、「ジュニア版日本文学名作選」(第一期一六巻+第二期一六巻↓全四〇巻↓五〇巻↓五二巻↓六〇巻、一九六四―七四)などの叢書が刊行されている。巻数表記でわかるように、叢書によっては途中で増殖している。「ジュニア版」などは、少なくとも一九七〇年代半ばくらいまで、一般の町の書店であれば、児童書コーナーに在庫がずらりと並べられていたことを記憶している。それだけ普及度が高かった叢書といえるだろう。

これらの叢書の内容検証を少しずつ進めていくことで、「日本文学」における、とくに「近代文学」「児童文学」における「カノン形成」の状況を見ていくことができるのではないか。

従来の研究では、子ども読者の「教養形成」がいかに図られたかという点をとくに注視してきた。今後は、そこに、文学の内容がいかに「カノン形成」されたかという点を加える。それにより、二〇世紀後半における日本の児童文学状況の中の「規範化」と「体系化」の交錯を、ときほぐしていくことをめざしていきたい。